

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

- ▶ 宮崎駿アニメーション作品の社会文化的形象—「老女」と「少女」の力関係を軸に—
由「年老女性」以及「少女」觀察日本宮崎駿動畫中之社會文化形象

doi:10.6205/jpllat.26.200912.02

台灣日本語文學報, (26), 2009

作者/Author：曾秋桂(Chiu-Kuei Tseng)

頁數/Page：21-45

出版日期/Publication Date：2009/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.6205/jpllat.26.200912.02>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



由「年老女性」以及「少女」觀察日本宮崎駿動畫中之社會文化形象

曾秋桂

淡江大學日本語文學系教授

摘要

眾所皆知，日本社會已經邁入高齡化的社會。而世界聞名的日本動畫大師宮崎駿（67歲）於發行最新作品《崖上的波妞》（2008年）之後，接受專訪中表示深覺年老將至。即使如此，宮崎駿動畫作品中，年老男性還是不多見。然而，「年老女性」自始自終常常出現，甚至『崖上的波妞』更有大篇幅的著墨。本論文將比較東亞風土的視點納入，以宮崎駿動畫中「老婦」與「少女」相互關係為主軸，比較分析其於各自社會文化中的定位，析論動畫大師宮崎駿的心境。

解析動畫大師宮崎駿擔任原著、腳本、監督三者之9部動畫（1984年-2008年）中，「年老女性」與「少女」的相互關係，可以以「保護」、「對立而至和解」、「對立歷經和解而至共生」三種模式來一言以蔽之。進而分析其間之消長，更明顯可以看出早期作品帶著濃厚的「保護」色彩，中期多為立場對立而至於和解。最重要是自2004年以後，更是歷經和解之後朝向共生方向發展。此共生模式，於《崖上的波妞》更是一覽無遺。

觀此發展應考量到無法生產勞動、必須倚賴他人的力量才能維持基本最低生活的「年老女性」的社會意義。其答案正存在於《崖上的波妞》中。《崖上的波妞》中的老人院隔壁正是幼稚園，此點顯示「年老女性」雖然不良於行動，仍可將生活智慧、寬廣的胸襟，以具體的態度、言詞傳承給幼小的兒童，一起共同生活。如此共生的模式，正是動畫大師宮崎駿的心情寫照。傳達出宮崎駿期盼年老將至的事實是無可避免的必然結果，應由老、中、青不同世代的人們，誠摯面對，真誠相待的訊息。

關鍵字：宮崎駿動畫 年老女性 少女 共生 《崖上的波妞》

The social cultural form of the Miyazaki Hayao animation film work; mainly with a power relationship of "old woman" and "girl"

Tseng Chiu-Kuei

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

Miyazaki Hayao has felt enter an old age of 67 years old by the latest work "PONYO on the cliff". The life of old women is a main theme of "PONYO on the cliff". This paper has elucidated the structure of the social cultural context from the social cultural climate of East Asia about "the aging" and "the youth" of "woman" on Miyazaki animation. A power relationship with an old woman and a girl has three types as "protection", "from opposition to reconciliation" and "to the symbiosis which passed through reconciliation from opposition" on 9 animations of a original work, scenario and director work by Miyazaki. There are a lot of relations of "protection" with an old woman and a girl. On the other hand, an old woman and a girl go to the reconciliation while opposing. After 2004, the way of the symbiosis is born from reconciliation by Miyazaki animation. The way of symbiosis also exists in the latest work "PONYO on the cliff". "PONYO on the cliff" has asked about the social meanings of the old woman who declined. The response is a neighborhood of a home for the aged and a kindergarten. An old woman wraps young children in the depth of the wisdom and the heart and symbioses. "PONYO on the cliff" indicates a model of symbiosis. Miyazaki is requesting that young and old have to catch the aging actuality which can't move without others' help. That's the Miyazaki's message in an old age.

Keywords: Miyazaki animation, old woman, girl, symbiosis, "PONYO on the cliff"

宮崎駿アニメーション作品の社会文化的形象 —「老女」と「少女」の力関係を軸に—

曾秋桂

淡江大學日本語文學系教授

日本語要旨

最新作『崖の上のポニョ』の公開後のインタビューからは、67才の老境に入ることを宮崎駿が深く自覚したことが窺える。老女は『崖の上のポニョ』に至って主なテーマとして登場している。本論文では、東アジアの社会文化的風土を視座に宮崎駿アニメでの「女性」の「老い」と「若さ」について、それぞれの社会の社会文化的文脈での構造を明らかにした。

原作、脚本、監督の仕事を担当し宮崎駿の意志が比較的強く反映した9本のアニメ(1984-2008)では、老女と少女との力関係は、「保護」、「対立から和解へ」、「対立から和解を経たのち共生へ」の三グループに分類出来る。各タイプの消長を細かく見ると、老女と少女とは「保護」の性質を帯びる関係が多く見られる一方、対立しながらも和解へと向かう道も示されている。2004年以後、和解から更に共に生きて行くという共生の方向が生まれてきた。新しく模索された共生という道は、最新作『崖の上のポニョ』にも見られる。

そこでは、自分の意志で動けないほど衰え、働けなくなった老女の社会的意味は何か問われている。その答えは『崖の上のポニョ』から見た限り、たとえば、老人ホームと幼稚園の隣接で、その知恵と懐の深さでまだ幼い子供たちを姿勢と言葉で包み、共生しているという点に求められる。そうした共生のモデルを示す形で、もう他者の助けなしには身動きできないという老いの現実を、老若が互いに真摯に受け止めてほしいと希望する、宮崎駿の老境にある者としてのメッセージがそこに込められていると言える。

キーワード：宮崎アニメ 老女 少女 共生 『崖の上のポニョ』

宮崎駿アニメーション作品の社会文化的形象 —「老女」と「少女」の力関係を軸に—

曾秋桂

淡江大學日本語文學系教授

1. はじめに

高齢化が進んでいる日本では、2006年に発表された厚生労働省の「日本人の平均余命平成18年簡易生命表」¹によると、男性の平均寿命が79.00才であるのに対して、女性は85.81才となっている。こういった社会事情に、アニメ作家として世界的に名高く、日本国内でも「比類なきブランド力を持つスタジオジブリという独立国」²を創出したと位置づけられている宮崎駿は注目している。それは、最新作『崖の上のポニョ』を公開してから、『菊とバッド』、『東京アンダーワールド』の著者ロバート・ホワイティングのインタビューを受けた内容から分かる。『崖の上のポニョ』に「これだけの老人が出てくるというのは、アニメーションとして珍しいことなのではないか」³というホワイティングの問いに対して、「日本は高齢化社会になっていますから⁴」と答えた上、自分も「中期高齢者」⁵だと表明している。こうしたコメントからは、67才の老境に入ろうとしていることを宮崎駿自身が深く自覚している⁶ことが窺える。

男性の宮崎駿が67才の老境に入ろうとしていることを自覚しているとすると、創作のアニメには、多かれ少なかれ老人の生き様を

¹ <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life06/index.html>

² 津堅信之(2008)「比類なきブランド力を持つアニメーション・スタジオの足跡スタジオジブリという独立国」『別冊カドカワ総力特集「崖の上のポニョ」スタジオジブリ』角川書店P128-131

³ (2008)「long interview宮崎駿」井上伸一郎『ジブリの森とポニョの海宮崎駿と「崖の上のポニョ」』角川書店P40

⁴ 同前(2008)「long interview宮崎駿」P40

⁵ 同前(2008)「long interview宮崎駿」P90では、「僕はまだ67歳で、後期高齢者ではないですけど、中期高齢者です」と述べている。

⁶ 宮崎駿が1941年、1月5日東京の生まれである。

探ることがあるであろう。しかし、『風の谷のナウシカ』の「ジル」、
「ユバ」、『天空の城のラピュタ』の洞窟で石を掘っている「ポム」
老人、飛行船を修理する掛かりの老人、『魔女の宅急便』の時計台を
掃除する老人、『紅の豚』の、中年の主人公「ポルコ」の飛行機を請
けた少女「フィオ」の祖父、『もののけ姫』の少年「アシタカ」の村
の長老達、『千と千尋の神隠し』の「釜爺」など、主人公に好意的で、
助ける役をする老人以外に、他のタイプは見られない。それに、最
新作『崖の上のポニョ』には、老人が登場していない。そのかわり
に、日本社会では、平均寿命が男性よりも7才近く長い老女が『崖
の上のポニョ』の一作だけではなく、宮崎駿のアニメにも登場して
いる。本論文では、東アジアの風土を視座に、異なる時代、異なる
文化圏の人物形象との比較を試み、宮崎駿のアニメーション作品で
の「老女」と「少女」の力関係を軸に、それぞれの人間社会に持
つ社会文化的文脈での構造を明らかにしたい。

2. 宮崎駿のアニメにおける女性の「古い」(老女)と「若さ」(少女)

次は、宮崎駿が監督したアニメ群に描かれた女性の「古い」と「若
さ」の対比である。それを作品ごとに整理すると、以下の表(1)にな
る。

表(1) 宮崎駿のアニメ群に描かれた女性の「古い」(老女)と「若さ」
(少女)

時期	内訳	作品名 (公開日)	配給収入 (円単位)	主な登場人物		
				少年少女	老女	熟年の 女性
助 走 期	1	風の谷のナウシ カ (1984. 3. 11)	7 億 4200 万	ナウシカ (女) アスベル (男)	大ばば (巫女)	クシャ ナ(ト ルメキ ア王 女)

離陸期	2	天空の城ラピュタ (1986. 8. 2)	5億 8300万	シータ(女) パズー(男)	ドーラ (海賊) ⁷	×
	3	となりのトトロ (1988. 4. 16)	5億 8800万 (火垂るの 墓との日本 立て)	サツキ(女 10才) メイ(女4 才) 勘太(男)	勘太の 祖母 (農村 主婦)	×
	4	魔女の宅急便 (1989. 7. 29)	21億 7000万	キキ(13才) トンボ(男)	老女 (奥様 と家政 婦)	ソノ (パン 屋のか みさん)
跳躍期	5	紅の豚 (1992. 7. 18)	27億 1300万	フィオ(17 才飛行機 設計士)	老女達 (飛行 機 製作所 の労働 者)	ジーナ (歌手)
	6	もののけ姫 (1997. 7. 12)	113億	サン(女) アシタカ (男・エミシ の裔)	ヒイば あさん (巫女) モロ (山犬)	エボシ (製鉄 村のリ ーダー) おとき (労働 者)
現在	7	千と千尋の神隠し (2001. 7. 20)	303億	千尋(女 10 さい) ハク(男)	ユバ ー バー (魔法 使い) ゼニ バー (魔 法使 い)	リン (湯屋 の労働 者)
	8	ハウルの動く城 (2004. 11. 20)	196億	ソフィ(女 18才の帽子 屋) ハウル(男魔 法使い)	荒地の 魔女 王室付 の魔女 のサリ	×

⁷ シータの祖母がシータの記憶の中に登場するがすでに死去しているのでここでは除く。

	9	崖の上のポニョ (2008. 7. 19)	155 億	宗介 (5 才) ポニョ (5 才)	マン 老人ホ ームの 老女達 トキ	リサ (宗介 の母)
--	---	--------------------------	-------	--------------------------	-------------------------------	------------------

注 1. 上表は、藤津亮太 (2004) 「スタジオジブリの歩み」『ユリイカ』12 月号第 36 巻第 13 号 P205-216 と、(2008) 『ジブリの森とポニョの海宮崎駿と「崖の上のポニョ」』角川書店 P176-185 を参考に纏めたものである。なお、表に上げた四つの時期、助走期 (1978-1984)、離陸期 (1985-1989)、跳躍期 (1990-2000)、現在 (2001-) は、藤津亮太の分類に準じた。

2. 8 番の「ハウルの動く城」の配給収入は、当参考書には掲げられていないが、フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』の「歴代映画興行成績出典」による数字である。当ホームページの備考では、「日本では 1999 年まで配給収入が用いられてきたが、2000 年から興行収入の発表に切り替わっている。配給収入 = 興行収入 × (50~60%)。興行収入に「約」がついているものは推定。資料によって微妙に数値が異なることがある」とある。

3. 9 番の「崖の上のポニョ」の配給収入の 155 億円は、2008 年末⁸までの計算という。

4. 「×」とは、登場していないことを意味する。

2.1. 女性の「老い」(老女)と「若さ」(少女)と力関係の変容

上のリストに挙げた 9 本のアニメ⁹は、スタジオでスタッフと協力して作った宮崎駿の総作品中から、原作、脚本、監督の仕事を担当し宮崎駿の意志が比較的強く反映した作品だけをピックアップしたものである。9 本とも登場している老女に、少女の役が配置され

⁸ 日本映画製作者連盟 <http://www.eiren.org/toukei/index.html> による。

⁹ 2008 年 8 月 5 日に東京日本武道館で「宮崎アニメと共に歩んだ 25 年間」をサブタイトルに名音楽監督久石譲のコンサートが開催された。「宮崎監督と作り出してきたアニメ映画 9 作品の映画音楽で構成された特別なコンサート」(『別冊カドカワ総力特集「崖の上のポニョ」スタジオジブリ』角川書店 P144) だと意味づけられたこのコンサートに取り上げられた 9 作品が表 (1) に掲げた作品と符合している故、この 9 作品をひとまとまりに見た本論文の試みは、風潮に合っているとと言える。

airiti

ている点では共通している。時に、老女と少女との組み合わせに、熟年の女性がさらに配置された場合も見られる。この熟年の女性が果たした役割をも、合わせて考慮することにする。なお、テキストとしてスタジオ・ジブリ版DVDを使用した。作品の仮想時代は14世紀から30世紀まで、作品の仮想空間は日本からヨーロッパまでというように、幅が広く、バラエティーに富んだ宮崎駿のアニメに登場した女性の「老い」(老女)と「若さ」(少女)を力関係に変換すると、次の「保護」、「対立から和解へ」、「対立から和解を経たのち共生へ」の3種類に大別できる。

①「保護」グループ

このグループに属している作品は、表(1)に挙げた通番1.3.4.5.6の5作品である。順番に沿って見よう。

作品時間を30世紀に設定した『風の谷のナウシカ』¹⁰では、風の谷に住んでいる人々をリードする「ジル」という族長とその姫「ナウシカ」がいて、その側近に「大ばば」という老女がっている。

「大ばば」は「王蟲」に襲われて大地が「腐海」に変わりつつある世界を生きている人々を破滅に追い込む大海嘯から救う救世主の、「その者青き衣をまといて金色の野に降りたつべし。失われた大地との絆を結び、ついに人々を清浄の地に導かん」という伝承を伝えている。「王蟲」の大群が風の谷を攻撃してきて、いよいよ最期かという時に「定めなら、従うしかないよ」と村人に告げた。このように、老女の「大ばば」は風の谷の人々の生死に関する重大な時期に、賢者として村人に方向を指示している重要人物である。一方、族長の「ジル」が敵に殺された後、自ら危険極まりない「王蟲」の大群に入り、「王蟲」の子を返すことによって、「王蟲」の怒りをおさめた「ナウシカ」は、まさに「大ばば」が予言した救世主である。この「大ばば」の老女は、少女の「ナウシカ」を見守る保護者だと言

¹⁰『風の谷のナウシカ』では、千年前に巨神兵が火を使って世界を7日間で焼き尽くしたことがその世界の前提であるため、仮に時代を『風の谷のナウシカ』が出来た1984年から千年後の30世紀に想定することもできる。

airiti

えよう。

同じ保護者の役割を果たしたのは、作品時間を 14、15 世紀の日本の室町時代中期に設定した『もののけ姫』¹¹に出た「モロ」という名を持つ雌の老山犬である。人間の捨て子「サン」を拾い、我が子のように育てた「モロ」は、祟り神になりかけた「猪の乙事主」から娘の「サン」を助けて息絶えた。人間ではないが、老女に相当する存在と見られる「モロ」は、生み親のように娘「サン」を最後まで守り続けた。

次の通番 3.4.5 の 3 作品は、守ろうとする意志は前の 2 作品より劣ってはいるが、好意的で親切な気持ちという点では変わらないため、「保護」のグループに入れたのである。時間を日本の昭和 30 年代に設定した『となりのトトロ』¹²では、田舎に引っ越して来たばかりの「メイ」と「サツキ」の一家の手伝いに来てくれた「勘太の祖母」がいて、田植仕事で忙しくしているにも関わらず、入院中の母の代わりに、「メイ」と「サツキ」の姉妹の世話を気軽に引き受け、優しい老女と造形されている。作品時間を戦争が起こらなかった 20 世紀半ばのヨーロッパに設定した『魔女の宅急便』¹³にも、魔女の修行に出ている 13 才の「キキ」に配達の仕事を頼んだ、上流階級に見える主婦とそのメイドの二人の老女がいる。顧客とはいえ、仕事の返礼として多くの代金をくれたり、誕生日に手作りのケーキを焼いてくれたりする優しい老女達である。これらも若者の保護者的存在と位置づけられよう。また、ファシスト党が支配する 1920 年代から 30 年代のイタリアに舞台設定した『紅の豚』¹⁴では、工場で働く老女達は一族の娘で設計士である「フィオ」の難しい飛行艇製作を助け、その離陸を援助する心優しい協力者である。

¹¹ 「PANORAMIC MIYAZAKI 1 仮想年代記」ユリイカ 8 月臨時増刊号 (2007・初版 1997) 『総特集宮崎駿の世界』第 29 巻第 11 号青土社

¹² 同前掲書『総特集宮崎駿の世界』

¹³ 同前掲書『総特集宮崎駿の世界』

¹⁴ 同前掲書『総特集宮崎駿の世界』

airiti

②「対立から和解へ」のグループ

このグループに属している作品は、表(1)に挙げた通番 2.7.8 の 3 作品である。順番に沿って見よう。

20 世紀前半のヨーロッパに設定した『天空の城ラピュタ』¹⁵には空中海賊のリーダーとして「ドーラ」という老女が登場している。

「ドーラ」は少女「シータ」が持つ貴重な飛行石を奪おうとして、「シータ」を人質にし、軍隊の厳しい監視下にある目的地の「天空の城ラピュタ」までに道案内してもらった。飛行石の奪い合いによる激しい戦闘を経たのち、天空の城ラピュタは崩壊してしまった。しかし、少年「パズー」と少女「シータ」が危うく命が助かったことを知った時に、「ドーラ」は心を開いて「シータ」を抱きしめた。このように、飛行石奪取を目的とした海賊の「ドーラ」ではあるが、最後に対立した「シータ」を抱しめるように、「シータ」との対立から和解へと進んだのである。

そして、1990 年以後のバブル崩壊後の日本に舞台設定した『千と千尋の神隠し』¹⁶は、名を「千尋」という少女が両親に連れられて引っ越す途中、道に迷って異界に踏み込んだ物語である。この異界では、人間あるいは動物の形をしている者は全て「湯婆婆（ユバーバ）」という老女の命令に応じて働いている。食べてはならぬ神様の食物を食べて豚にされてしまった両親を救出するために、「千尋」は「湯婆婆（ユバーバ）」にいろいろと難題を出された。また、異界で初めて出逢い、好きになった「白（ハク）」という少年がいる。その少年は「湯婆婆」の手先として働き、双子の姉妹「銭婆（ゼニーバ）」のハンコを盗んだ。それによって罰を与えられて、意識不明になった「白」を助けるために、「千尋」は「銭婆（ゼニーバ）」の所に向かって、ハンコを返して赦しを求めようとした。様々な試練に耐えて、

¹⁵ 同前掲書『総特集宮崎駿の世界』

¹⁶ 『千と千尋の神隠し』では、異界に迷い込んだ千尋の父が周りの風景を見て、これは 80 年代のバブルの頃に造られたテーマパークの跡だと言ったことから判断したのである。

airiti

「錢婆（ゼニーバ）」からは赦しを得、「湯婆婆（ユバーバ）」からは両親に掛けられた魔法を解いてもらったのである。要するに、異界のリーダーとして采配を振る舞った双子の姉妹「錢婆（ゼニーバ）」、「湯婆婆（ユバーバ）」は「千尋」と対立したが、結局「千尋」から奪った「千尋」の大事な両親、恋人を返したという結末になった。これも対立から和解へと歩む物語として読み取れよう。

『千と千尋の神隠し』と同じく魔法が大きな役割を持つ作品として、作品時間を19世紀後半と20世紀前半が混在するヨーロッパ風の世界に設定した『ハウルの動く城』には、二人の魔法使いの老女が登場している。一人は、「サリマン」という王室付の魔女であり、一人は「荒地の魔女」である。魔女の「サリマン」は話しを聞かなくなった弟子の「ハウル」を快く思わず、「ハウル」と魔法戦争を展開し、「ハウル」を追跡するようになった。気の弱い「ハウル」は、家政婦としてハウルの動く城で働くようになった「老婆のソフィー」に支えられ、守る家族が出来たと実感し、恐るべき「サリマン」と対抗するようになった。「ソフィー」に支えられて強くなった「ハウル」を見て、「サリマン」は詰まらない魔法戦争に気づき、無意味な戦争をやめることにした。これは、魔女の「サリマン」が「ハウル」と「ハウル」を力強く支えている「ソフィー」との対立から和解へと向かう用例である。

これらの作品の「老女」は最初は強さゆえに若者たちに立ちはだかる障害であるが、その難題に出会って克服し成長した後の若者たちにとっては、共感の相手となる、いわば教師的存在とも言えよう。

③「対立から和解を経たのち共生へ」のグループ

このグループに属している作品は、表(1)に挙げた通番8の作品である。

『ハウルの動く城』に出るもう一人の魔女の「荒地の魔女」は、ゴム人間を手先に男の主人公「ハウル」の所在を追跡している途中、それに巻き込まれた「ソフィー」という18才の娘に魔法を掛けて、90才の老女に変えてしまった。しかし、その後、王に呼ばれて宮殿

airiti

に赴いた時に、個室に案内された「荒地の魔女」は魔法を解かされ、ただの老女になってしまった。「ハウル」が「サリマン」と魔法戦争を行っている際に、同じ王に呼ばれて宮殿に赴く「ハウルの母」と自称した「ソフィー」に「荒地の魔女」はしがみついて、そのまま「ソフィー」と一緒に救出され、「ハウル」の動く城で暮らす擬似家族の一員となった。この人物は、魔法を掛けて90才の老女に変えた最初の対立から、宮殿から救出されて城で暮らす擬似家族になるという和解を経て、生活面で助け合うようになるという共生、いわば共に生きていくこと、への道を辿っているのである。

老女と少女との力関係を逆照射するために、少女と熟年の女性との関係を対照的に取り上げて見よう。表(1)に示すように、『魔女の宅急便』では、主人と相談せずに、パン屋のかみさんの「ソノ」は「キキ」に貸家をした。パン屋のかみさんの「ソノ」は、すなわち「キキ」の協力者である。それと同様に、『千と千尋の神隠し』の、湯屋で働いている「リン」も千尋を助けている。いずれもこれらの熟年の女性は少女を守る「保護者」のような存在である。

それに対して、『風の谷のナウシカ』のトルメキア王女「クシャナ」は巨神兵の幼生を強奪する使命を帯びて軍を指揮し、辺境の風の谷を征服した。「ナウシカ」の父「ジル」は「クシャナ」の兵の手にかかって命を落とす。「クシャナ」は巨神兵の力で腐海を焼き払い人間の世界を取りもどうそうとするが、「ナウシカ」は腐海の生物の環境浄化の役割を知って、あくまでも共存を目指す。「クシャナ」は「ナウシカ」の自身を犠牲にして王蟲の群れに身を投じた姿に感動を受けるが、最後まで力による闘争を諦めずに、軍とともに谷を去る。「クシャナ」は荒れ果てた谷を再生させるべく深い井戸を掘って木を植える。二人の王女はラストまで和解することなく、その生き方は対照的なまま平行線を辿る。また、森の主と見られる「シシ神」と深い森を守り続けている『もののけ姫』の「サン」と、鉄を作っているタタラ製鉄所のリーダー「エボシ」との緊張関係も最後まで少しも緩んでいない。対立関係の延長において見れば、『もののけ姫』

の「サン」は『風の谷のナウシカ』の「ナオシカ」の後身と見られ、王女「クシャナ」は「エボシ」と見なすことができる。すなわち、即ち、宮崎駿のアニメ群によく見られる二項対立的課題、「サン」と「ナオシカ」が代表する自然共生派對「クシャナ」と「エボシ」が代表する改革開発派との対立は、価値観が懸隔しているゆえ、その相克はいつまでも続いていくのである。

少女と熟年の女性との間で「保護」と「対立」以外に、もう一つの類型が見られる。『紅の豚』の熟年の歌手「ジーナ」と少女の「フィオ」の二人は、中年の「ポルコ」をめぐる、互いに微かな恋のライバル意識を持っていたが、最後のエンディング・シーンで成長した「フィオ」が言っている「ジーナ」と「とてもいい友達になった」のセリフから、二人が仲良しとなったことが分かる。これは、「対立」までには至っていない少女と熟年の女性が仲良くなったタイプである。

このように、宮崎駿のアニメにおいては、老女と少女との対立は解消されたが、少女が熟年の女性と明確に対立すると、その対立は解消されずに最後まで続いていると見られよう。こうした例は、年層の差が大きければ、大きいほど対立は解消するが、年層が近ければ、価値観の相違による対立の解消がそれなりに難しくなることを暗示しているであろう。

さらに作品の公開日順に並べて、表(2)にまとめて、「保護」、「対立から和解へ」、「対立から和解を経たのち共生へ」の各タイプの消長を見てみよう。

表(2) 女性の「老い」(老女)と「若さ」(少女)の力関係

性質 作品名	①保護	②対立から和解へ	③対立から和解を経たのち共生へ
風の谷のナウシカ (1984. 3. 11)	大ばば→ナオシカ		

天空の城ラピュタ (1986. 8. 2)	(※シータの亡 くなった祖母→ シータ)	ドーラ→シー ター	
となりのトトロ (1988. 4. 16)	勘太の祖母→メ イとサツキ姉妹		
魔女の宅急便 (1989. 7. 29)	顧客→キキ		
紅の豚 (1992. 7. 18)	老女達→フィオ		
もののけ姫 (1997. 7. 12)	山犬モロ→サン		
千と千尋の神隠し (2001. 7. 20)		湯婆婆→千尋 銭婆→千尋	
ハウルの動く城 (2004. 11. 20)		王室付の魔女 →ソフィー	荒地の魔女→ソ フィー
崖の上のポニョ (2008. 7. 19)			トキ→宗介

表(2)を見て分るように、老女と少女とは、「保護」の性質を帯びる関係が多く見られる一方、対立しながらも和解へと向かう道も示されている。そして、2004年以後、和解から更に共に生きて行くという共生の方向が生まれてきた。新しく模索された共生という道は、最新作『崖の上のポニョ』にも再び見られる。

2.2 『崖の上のポニョ』に見られる「老い」と「若さ」の意味

従来の宮崎駿のアニメ群に新しい機転をもたらした作品に『崖の上のポニョ』がある。それをキャラクター、老女の特徴、共生の道の3点に分けて詳論しよう。

まず、キャラクターの性別から論じよう。

宮崎駿のアニメ群に見られる老女と少女との組み合わせは、ここ

airiti

では崩れている。少女に置き換えて、ここでは男の子宗介が登場している。こういった置き換えは、『崖の上のポニョ』の前作の『ハウルの動く城』にも既に兆しを見せている。例えば、王室付の魔女と荒地の魔女が追い詰めたいのは、「ソフィー」ではなく、実は「ハウル」である。とはいえ、逃げてばかりいた「ハウル」を支えて強く闘わせたのは、「ソフィー」である。裏返しに言えば、「ソフィー」を抜きにして、「ハウル」は到底王室付の魔女と荒地の魔女に立ち向かって対立できなかったであろう。従って、老女は「ハウル」を目当てにしたが、実質的には「ハウル」と、彼を支えている「ソフィー」のコンビと対立したのである。

話を老女達と宗介に戻す。『崖の上のポニョ』では、宗介が嬉しそうに「ポニョ」を「ヨシエ」、「カヨ」、「ノリ」の老女達に見せて、同調してもらった。しかし、「トキ」という老女に見せると、「おお、いやだ。人面魚じゃないか。早く海に戻しておくれ。津波を呼ぶよ。人面魚が浜に上がると、津波が来るんだ。昔からそう言うんだ」と予言めいたことを言われ、その座が白けた。その時、「ポニョ」が水を「トキ」に吹きかけた。このシーン以外、実は老女達が直接に「ポニョ」と関わっている場面はラストシーン以外にない。題名は『崖の上のポニョ』であるが、老女と親密に関わり合っているのは、実は「ポニョ」ではなく、宗介という5才の男である。

次に、老女の特徴を見よう。『崖の上のポニョ』の老女達は介護施設に寄宿している、車椅子に乗っている老女である。言い換えれば、他人の手を借りないと、自力で生活を思うままにできないのである。この設定は、明らかに今まで見てきた老女のタイプ¹⁷とは違っている。今までの宮崎駿のアニメ群に見られる老女は、専門的才能を発揮したグループのリーダー(『風の谷のナオシカ』の「大ばば」(予言者)、『天空の城ラピュタ』の「ドーラ」(空中海賊)、『もののけ姫』の「ヒイ婆さん」(巫女)、『ハウルの動く城』の王室付の魔女

¹⁷同前掲曾秋桂論文

airiti

「サリマン」、「荒地の魔女」)や、社会の規範を管理、維持する責任者(『風の谷のナウシカ』の「大ばば」、『千と千尋の神隠し』の「湯婆婆」、「銭婆」、『もののけ姫』の「ヒイ婆さん」)や、宮崎駿のアニメに大きなテーマとしてある労働¹⁸を通して村や家族に貢献する自立的な人間(『となりのトトロ』の「勘太の祖母」、『紅の豚』の飛行艇の工場で働いている老女達)のように形象されている。ここでは、従来、有能に働いていた管理者、指導者、労働意欲の高い老女から一転して、介護施設にいるただの老婆になるという設定の変化が初め見られ、宮崎駿のアニメ群においては特異に見える。

管理者、指導者ではないにしても、『崖の上のポニョ』では、「ヨシエ」、「カヨ」、「ノリ」のような、従来 of 老女の持つ優しい気持ちとは全く変わらない老女達と、辛辣な口調で物事を言う、気難しい「トキ」の老女が新しく造形されている。「トキ」は4場面にセリフを持って登場している。それは、「ポニョ」の披露、嵐による停電の夜、宗介と「ポニョ」の父「フジモト」との対決、平和を取り戻した最後のシーンの4場面である。「ポニョ」の披露では、宗介が嬉しそうに見せた人面魚「ポニョ」に、「おお、いやだ。人面魚じゃないか。早く海に戻しておくれ。津波を呼ぶよ。人面魚が浜に上がると、津波が来るんだ。昔からそう言うんだ」と、「トキ」は遠慮なく予言めいたことを言った。2回目の嵐による停電の夜の場面では、「トキ」が、「だからお泊まりはいやだって言ったんだよ」、「气象局がだらしがない。天気予報がちつとも当たらないじゃないか」とケチをつけた。また、宗介が渡してくれる折り紙を見て、「くじゃくじゃだね。何んだ。これ」と言って軽視した「トキ」は、船だと宗介に説明されても、「バツタみたいに見える」と自分の意見を譲らない。帰りの際に、親切に挨拶してくれた宗介に、「風に飛ばされるんじゃないよ」

¹⁸木村立哉「生きるということ、あたたかさの記憶。宮崎駿のなかにいる「労働」と「仲間」」(2004)『ユリイカ宮崎駿とスタジオジブリ』第12号青土社 P173-174では、「宮崎世界では、「労働を介して「仲間」になった集団が多く描かれている」と指摘している。

airiti

と意地悪く応答した。そして、ポニョの母である「グランマンマーレ」¹⁹の魔法の力によって足が歩けるようになって、ずんずんと丘の上にある老人ホームを目指して登っているラストシーンでは、「大丈夫か」と聞いた介護施設の職員に、「トキ」は「自分で歩く」とその好意を拒んだ。このように、気難しく近寄りがたい老女「トキ」という形象は宮崎駿のアニメ群で初めて見られた人物像である。

しかし、このような気難しく近寄りがたい老女「トキ」にしても、宗介と「ポニョ」の父「フジモト」との対決では、「ポニョ」の父「フジモト」の罠に嵌りそうな宗介に、身を安全に隠したあずまから姿を現して、「そいつに騙されじゃだめだよ。甘い言葉を言って、皆を連れて行ってしまった。私は騙されないからね。嘘ならもっとまじな嘘をつきな」と、賢者のように宗介に悟らせた。また、「フジモト」の使った魔法の波に攫われそうな宗介に、「宗介、お出で、頑張れ、もうちょっと」と励ました。こうして見ると、「トキ」は、口には辛辣に物事を言っているが、その言ったことには真実が潜んでおり、非常時に身さえ捨てて宗介を守るという優しい気持ちを持っている老女なのである。昔から言い伝えた「人面魚が津波を呼ぶ」こと、「フジモト」の甘い言葉が本当は嘘だと見抜いたのは、老女「トキ」一人である。このように、生活の知恵を持って他人を導く役割を、辛辣に物事を言っている「トキ」が果たしていると言えよう。宮崎駿の母親に対する特別な感情を「トキ」に投影させた²⁰という、長年宮崎駿と一緒にアニメ製作に提携してきたプロデューサー鈴木敏夫の説もあるが、『崖の上のポニョ』に至って、口は悪いが内容には真

¹⁹これは「ポニョ」の母と直接に対面し、言葉を交わした宗介の母リサが言った言葉である。宗介の父耕一の舟に乗っている船人が「ポニョ」の母のことを「観音様」と言っている。要するに、「ポニョ」の母が生命の母というイメージが付されているのである。

²⁰鈴木敏夫(2008)「「ポニョ」と交わした約束」『別冊カドカワ総力特集「崖の上のポニョ」スタジオジブリ』角川書店P33では、「宮崎駿という人は、少年期の育った環境から、お母さんに対する特別な感情を持っている。その感情を映画に投影させたかった。それが端的な答えだと僕が思います。純粋にトキさんをもっと出したかったんですよね」と指摘している。

airiti

実があり、目に見えない優しさを内蔵している「トキ」のような老女が、宮崎駿のアニメ群に新しく登場したことは、画期的だと言わざるをえない。

宮崎駿のアニメ群において特異に見える介護施設にいるただの老婆の登場が宮崎駿が老人ホームに行って見た経験²¹によるものにせよ、老人ホームと保育園は一つになるべきだという宮崎駿の主張²²の反映であるにせよ、いずれも、「古い」の課題の重みを感じられよう。さらに4年前の63才の作品『ハウルの動く城』に遡って見ると、魔法が解かれてただの老女となった「荒地の魔女」は坐ったまま、「ソフィー」の世話になるシーンが初めて見られる。その時点から4年の歳月が流れ、67才で創作した『崖の上のポニョ』に介護施設にいる老女を登場させ、「老女達がメインとなる数シーンを入れることにこだわった」²³ところに、老境に入る宮崎駿の思い、老女への愛着がますます深まりを見せている。これも日本社会における高齢化が深刻化しつつある現状を目にした宮崎駿が、60才代に入ってから持つようになった新しい視点だと言っても過言ではない。

最後に「若さ」（『崖の上のポニョ』の場合は、少年の宗介）との力関係であるが、「ヨシエ」が代表する優しい老女は宗介に好意的である。一方、辛辣に物事を言う「トキ」と宗介との²⁴関係には、変

²¹同前(2008)「long interview宮崎駿」P44-45では、宮崎駿が老人ホームに行ったことを「友人のお見舞いで、何か所行ったんです。精神病院にも行きましたけど、不愉快なところだと思いましたね」と語っている。

²²同前掲「long interview宮崎駿」P45では、「僕はデイケアサービスセンターと保育園は、ひとつになるべきだと思っています。だからといって、それは政治的に訴えるために、作品を作っているわけではないですよ」と言っている。

²³鈴木敏夫(2008)「『ポニョ』と交わした約束」『別冊カドカワ総力特集「崖の上のポニョ」スタジオジブリ』角川書店P32では、老人がメインとなる数シーンを入れたことについて、鈴木敏夫が「20分間おばちゃんのことをやると、話がややこしいと思ったんです。(笑)つまり、ポニョと宗介の話ではなくなってしまい、とりわけトキさんが中心になっちゃう」と指摘している。

²³(2008)「long interview宮崎駿」井上伸一郎『ジブリの森とポニョの海宮崎駿と「崖の上のポニョ」』角川書店P40

²⁴鈴木敏夫(2008)「『ポニョ』と交わした約束」『別冊カドカワ総力特集「崖の

airiti

化が見られる。宗介の気に入った人面魚「ポニョ」を見せてもらおうと、「ああ、いやだ、人面魚じゃないか。はやく海に戻しておくれ。津波を呼ぶぞ」と、宗介の期待を裏切ってしまった。また、宗介がくれた折り紙を見ると、「くじゃくじゃだね。何んだ。これ」と軽視したのち、船だと宗介に説明されても、「バツタみたいに見える」と言い張って、宗介との対立は相変らず続いている。しかし、「フジモト」の使った魔法の波に攫われそうな宗介に、「トキ」は、「宗介、おいで、頑張れ、もうちょっと」と励ましたうえ、自らの身体をはって宗介を危険から助けた。ここで、二人の対立が解かれ、和解の道へ進んだのである。最後の、「ポニョ」の母である「グランマンマーレ」に生命力をもらった「トキ」をはじめとした老女達は自分の足で丘の上にある老人ホームを目指して登っていった。これは目的地の老人ホームでの暮らしを再開することを意味すると共に、老人ホームに隣接している保育園との間を抜けて保育園に通っている宗介との共生の意志を表しているであろう。

要するに、『崖の上のポニョ』に見られる「古い」と「若さ」の意味は、「共生」という一言に集約できるのである。

2.3 宮崎駿のアニメ群で教育者の姿を持つ老女の形象

従来、宮崎駿の老女は「若い者に諭しや導きを与え、物語に深い奥行きを与える。宮崎駿の作品の深いテーマを語るには必要不可欠な存在であり、主人公である少年少女の若さをより強調する」²⁵と指摘されてきたが、『崖の上のポニョ』での「トキ」の形象を合わせて考えると、それは確かに的はずれの論説ではないと思われる。ただし、辛辣に言った受け入れにくい意見には真実があり、表には見

上のポニョ』スタジオジブリ』角川書店P33では、「多くの論者が、宮崎駿が宗介に自分自身を、トキに彼の母親の姿を重ねているのではと見る登場人物だが、鈴木もそれを否定しない」とある。

²⁵原田小百合・磯田勉・吉岡淳哉「宮崎駿ワールド解説」養老孟司編(2007・1999初版)『フィルムメーカーズ⑥宮崎駿』キネマ旬報社P713

airiti

えない優しさを実に心に内在している「トキ」のような、車椅子に坐った教育者の姿を持つ老女が斬新に宮崎駿のアニメ群に登場したことは吟味すべきことであろう。若者を導く老女は、高齢化社会の危機が言われる以前の1980年代から宮崎駿の作品では大きな位置を占めており、2004年以後ますます明確に作品で描かれるようになっていく。それは日本の高齢化社会の現状を顧みる反省でもあり、その将来の方向を示す理想でもあるのであろう。従来の、グループや地域社会の規範を管理、維持する責任者を担ったり、労働を通して自立心を見せる老女の姿がある一方、車椅子を頼りにしないと身体が思うように動かない介護施設で暮らしている「トキ」のような老女は、辛辣な口調で物事の背後にある真実を明白に若者に開示する存在である。老いても盛んに働ける体力の衰えていない姿であれ、老いて体力には限界が感じられるが、知恵や洞察力は衰えていない姿であれ、ともに老女が若者を導く教育者の姿を持っているという点は宮崎駿のアニメ群に共通している老女の姿である。

3. 東アジア風土を視座に見た老女—「教育者の姿」を中心に

次に、東アジアの地域を視座に、宮崎駿のアニメーション作品群における老女の教育者の姿を中心に、異なる時代、異なる文化圏の人物形象と比較し、それぞれの人間社会に持つ社会文化的文脈での構造を明らかにしたい。

論者は、かつて「老女」という「老い」の社会文化的形象を、中国の古典小説と台湾文学の代表者の一人である張文環の文学作品との比較を通して、いわゆる東アジアの社会文化的観点から宮崎駿のアニメーション作品における「老女」の形象を追求したことがある。結論だけ²⁶を纏めて言うと、次のようになる。

3.1 中国の古典小説にある女性の「老い」と「若さ」

²⁶詳細は、曾秋桂「「老女」という「老い」の社会文化的形象—張文環の文学作品と宮崎駿のアニメーション作品との比較から—」日本比較文化学会(2009)『比較文化研究』86号P1-15を参照されたい。

airiti

中国の古典小説によく登場したが、無視された老女と関係深い「三姑六婆」を綿密に研究した林保淳の研究成果では、「三姑六婆」を「尼姑、道姑、卦姑、牙婆、媒婆、師婆、虔婆、藥婆、穩婆」と容認的に見ている²⁷。「三姑」は、仏教の寺で修行する尼、道教の宮で修行する尼、自宅で占い、呪文を専門的にする女性の三種類で、専ら宗教信仰に関わっている女性達²⁸である。「六婆」は、ほとんど携わった仕事の種類と関係し、二種類以上の仕事にまたがっている場合も少なくないが、一応、小物売りをする人、媒酌人、巫女、水商売の管理人、藪医者、助産士²⁹といった通りである。そして、中国の古典で描かれた「三姑六婆」の形象は、女性の身分を生かして、口が達者で、金銭を目当てに悪事に走り、水商売関係の売買を仲介するといった具合である³⁰。「三姑六婆」は中国の古典小説作品では大体マイナスに描かれ、批判のままとされる傾向にある。その理由を、林保淳は中国古来の儒教思想に深く影響された知識人が自分の目を通して見た「三姑六婆」しか登場させないことに求めている³¹。

ちなみに、台湾では、中国古典の流れを受けて、13才以前の子供に中国古典を素読させる場合³²、6才の子供に素読させる教材としては、『朱子治家格言』³³（『朱子家訓』³⁴ともいう）がある。そこに

²⁷ 林保淳（2003）「市井婦女撼綱常—古典小説中の「三姑六婆」『古典小説中の類型人物』里仁書局P63

²⁸ 同前掲林保淳書P63-64

²⁹ 同前掲林保淳書P64-68

³⁰ 同前掲林保淳書P70-80

³¹ 同前掲林保淳書P80

³² これを特色として掲げて義務教育に携わっている、台湾台北市北投区にある評判のよい「薇閣」学校がある。該当学校は、幼稚園から高校まで設けている。幼稚園に入学した5才の園児から中学校までに毎週古典を暗記させる教育を行っている。また、一学期に一回につき、凡そ24頁の内容を一気に暗記するテストを教師の認定のもと、不定期に開き、園児の学習意欲を高める方法を採用している。

³³ それは、(2008・初版1990)『児童中国文化導読⑦』老古文化事業出版社P48-52に収録されている。

³⁴ 『児童中国文化導読⑦』P47では、中国の明朝の終わりから清朝の始まりにかけて生まれて、儒学を深く会得した朱柏廬という人の著作で、子供教育を啓発

は「三姑六婆、実淫盗之媒」（三姑六婆 実に淫盗の媒ちなり）とはつきりと載せられている。これは、「三姑六婆」が教育者どころか、悪事を仲立ちする役割を担っている人物だと子供に教育を施しているのである。

3.2 張文環の小説群に見られる女性の「老い」と「若さ」

視点を変えて、20世紀前半の台湾文学の代表者の一人の張文環の小説群に見られる女性の「老い」と「若さ」を見よう。張文環の小説群25篇のうち、老女が登場したのは、半数以上の14篇³⁵である。しかし、宮崎駿のアニメ群のように、老女と少女と組み合わせて登場することはあまりない。特に、男性と対等に行動している一方、男性の心理、女性の嫉妬をわきまえて、人間の機微を知り尽くしている素質を具えている『辣蕪の壺』の「阿粉婆」（50才近く）、『闍雞』の「阿金婆」（明示されていない）、『地に這う者』の「阿媛」³⁶（53才）の3人は、個人的利益をもたらすと共に、男尊女卑の社会的壁を乗り越えた村の中心的人物³⁷とはなったが、無学だと強調された故、老女が若者を導く教育者の姿として形象されていないであろう。また、台湾の社会では、自作の『論語』に描かれたように、若者の教育が寺子屋や学校などに任せられていた制度によることもあろう。

3.3 異なる文化圏に見られる文化的社会的役割を占める老女の形象

儒教思想を重んずる伝統的中国社会の老女は、「三姑六婆」の熟語に表す如く、社会文化的秩序中の位置が与えられない異端的存在であった。中国古典小説の作者が儒教思想を規範に、その規範の破

する上で多大な意味を持つ書物だと触れられている。

³⁵ 同前掲曾秋桂論文P3

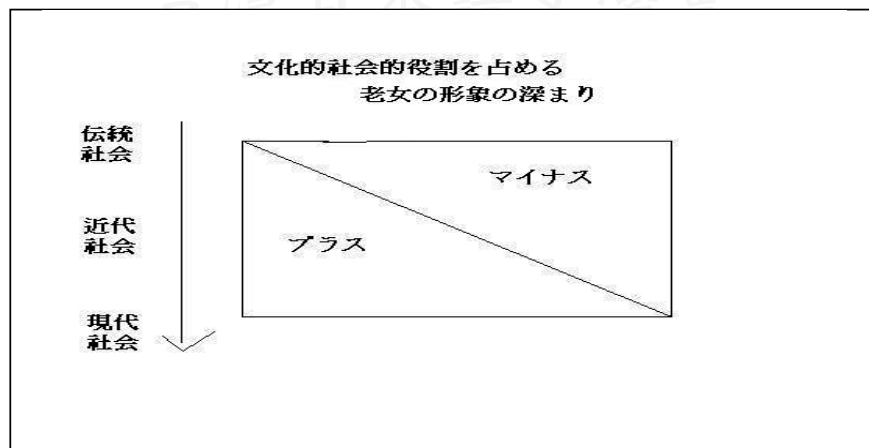
³⁶ 「阿媛」を年老いたグループに入れたのは、張文環の小説作品での、年の若い順番に「姉」、「嫂」、「孀」、「婆」といった言い方の特質、「阿粉婆」と似た性格を持っている同年代の人を考えた結果である。

³⁷ 同前掲曾秋桂論文P6-8

壊者として老女を形象したためと考えられる。それに比べ、20世紀前半の台湾文学者張文環の作品では、年を取ると、地域社会への忠誠貢献が重視される台湾社会の要請に応える協力者として老女の社会的役割が肯定的評価を伴って現れる。地域ネットワークの協力者、コーディネーターとして、老女は台湾の社会文化的事象中に確かな位置を持っている。さらに、作品の時空を一時期、一国に限定しない複合的重層的構造を持つ宮崎駿のアニメ世界では、年老いて盛んになる女性のパワーが高く評価されている。同時に、グループや地域社会の規範を維持管理する責任を担い、労働を通して自立心を見せる老女の姿は、東アジアの風土の中で老女に与えられていた社会文化的事象が現代的に自覚され再構築されたものとも言えよう。

老女を軸として、その社会的文化的事象の評価の変遷を辿ると、以下のように図示できるであろう。

図（1）異なる文化圏に見られる文化的社会的役割を占める老女の形象



4. 結論

宮崎駿の新作『崖の上のポニョ』（2008）が発表された後、一番好きな宮崎アニメの作品を『となりのトトロ』から『崖の上のポニョ』

airiti

へと、ラキングチェンジをした観客の声が聞こえてきた³⁸。その好きな理由を突き詰めると、さまざまあるが、決して多く登場している老女によるものではない。とはいえ、上述したように、『崖の上のポニョ』が老女の形象に変貌をもたらしたことと関連して考えると、日本で大好評を受けた『崖の上のポニョ』を楽しんでいると同時に老女の形象をも視野に入れたはずである。

『崖の上のポニョ』に至るまでの宮崎アニメ作品には、専門的技能を持ち、グループのリーダーとして社会規範を守る役目を果たしている老女は大半を占めている。悪役であっても、若者を導く、いわば反面教師の意味もあろうが、教師たる姿勢の範囲からはみ出していない。それに対して、『崖の上のポニョ』に至っては、老女の老後生活しか描かれていないゆえ、老後に入る前に、老女達がグループのリーダーの座についていたかどうかは分からない。しかし、たとえば、グループのリーダーについていたとしても、今は、そのリーダーの座から降りた、ただの老女だということが作品でのインパクトである。その点で、この作品では、明らかに、自分の意志で動けないほど衰え、働けなくなった老女の社会的意味は何かが問われている。その答えは作品から見る限り、たとえば、老人ホームと幼稚園の隣接で、「ヨシエ」、「カヨ」、「ノリ」のような宗介たちを見守り、その話を真剣に聞き関心を向ける役であれ、「トキ」のように率直に意見や感想を述べ、あるいは正しい道へ案内する役であれ、ともにその知恵と懐の深さでまだ幼い宗介たちを姿勢と言葉で包み、共生しているという点に求められる。そうした共生のモデルを示す形で、もう他者の助けなしには身動きできないという老いの現実を、老若が互いに真摯に受け止めてほしいと希望するという、宮崎駿の老境にある者としてのメッセージがそこに込められていると言える。

(本論文は、7月13日から16日までオーストラリア・シドニーで開催された

³⁸(2008)『別冊カドカワ総力特集「崖の上のポニョ」スタジオジブリ』角川書店

airiti

「2009年度豪州日本研究大会・日本語教育国際研究大会（JSAA-ICJLE2009）」7月13日－16日開催で発表した内容を加筆訂正したものである。）

テキスト

陳万益主編(2001)CD-ROM『張文環日本語作品及び草稿全編』台中県立文化中心
スタジオ・ジブリ(1984)『風の谷のナウシカ』DVD版 Buena Vista
スタジオ・ジブリ(1986)『天空の城ラピュタ』DVD版 Buena Vista
スタジオ・ジブリ(1988)『となりのトトロ』DVD版 Buena Vista
スタジオ・ジブリ(1989)『魔女の宅急便』DVD版 Buena Vista
スタジオ・ジブリ(1992)『紅の豚』DVD版 Buena Vista
スタジオ・ジブリ(1996)『もののけ姫』DVD版 Buena Vista
スタジオ・ジブリ(2001)『千と千尋の神隠し』DVD版 Buena Vista
スタジオ・ジブリ(2004)『ハウルの動く城』DVD版 Buena Vista

参考文献

- I、書籍・論文関係
(2008・初版1990)『児童中国語文化導読⑦』老古文化事業出版社
宮崎駿(2002・初版1996)『出発点1979～1996』徳間書店
(2007・初版1997)『ユリイカ総特集宮崎駿の世界』第29巻第11号青土社
養老孟司編(2007・1999初版)『フィルムメーカーズ⑥宮崎駿』キネマ旬報社
陳万益主編(2001)CD-ROM『張文環日本語作品及び草稿全編説明手冊』
台中県立文化中心
宮崎駿(2002)『風の帰る場所ナオシカから千尋までの軌跡』ロッキング・オン
中島利郎・川原功・下村作次郎監修(2002)『日本統治期台湾文学集成2台湾
長篇小説集二』緑蔭書房
スーザン・J・ネイピア著神山京子訳(2002)『現代日本のアニメ『AKIRA』から
『千と千尋の神隠し』まで』中央公論新社
林保淳(2003)『古典小説中的類型人物』里仁書局
(2004)『ユリイカ宮崎駿とスタジオジブリ』第36巻第13号第12月号青土社
佐々木隆(2005)『「宮崎アニメ」に秘められたメッセージ』KKベストセラーズ
岸正尚(2006)『宮崎駿、異界への好奇心』菁柿堂
(2008)『別冊カドカワ総力特集「崖の上のポニョ」スタジオジブリ』角川書店
(2008)『ジブリの森とポニョの海宮崎駿と「崖の上のポニョ」』角川書店
曾秋桂(2009)「老女」という「老い」の社会文化的形象—張文環の文学作品
と宮崎駿のアニメーション作品との比較から—『比較文化研究』
86号日本比較文化学会
- II、インターネット関係
日本厚生労働省「日本人の平均余命平成18年簡易生命表」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life06/index.html>
日本映画製作者連盟 <http://www.eiren.org/toukei/index.html>